

土木紀行

開発事業のあゆみ

函館港

物流を中心とする多彩な機能
を持つウォーターフロント

北海道函館市

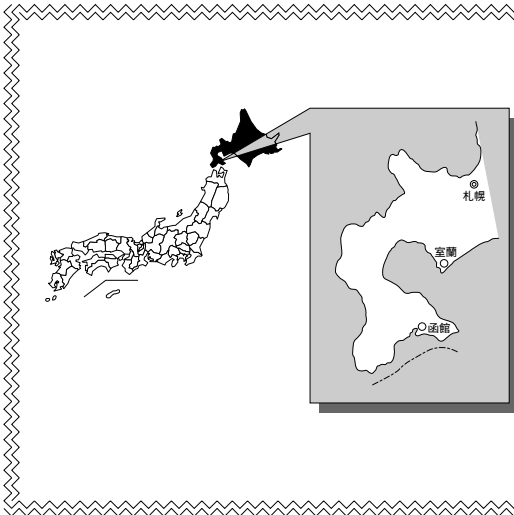


写真 1 函館山から望む函館港

横浜，長崎とともに，わが国最初の貿易港として開港した函館港。昭和26（1951）年に重要港湾に指定され，北海道と本州および海外を結ぶ物流拠点として，道内産業の発展に大きな役割を果たしてきました。さらに，「観光」や「食」，「憩いの場・交流の場」など多彩な機能を併せ持つウォーターフロントとしての整備も進んでいます。

わが国最初の貿易港

函館港は津軽海峡に面し，古くから天然の良港として知られてきました。安政2（1855）年3月外国船への薪水（まきと水），食料の補給港として指定され，安政6（1859）年6月には修好通商条約締結により横浜，長崎とともにわが国最初の貿易港となりました。国際貿易港としての性格に加え，明治6（1873）年には開拓使によって函館～青森間に定期航路が開設され，本州と北海道を結ぶ要衝（交通の重要拠点）となりました。

明治29年から始まる近代港湾への整備事業

函館港では，明治12年から港湾調査に着手し，明治23（1890）年から5年間は，北海道庁技師の廣井勇らが港湾調査を行っており，以来着々と港湾整備が進められてきました。函館港の近代港湾としての歴史は，明治29（1896）年の「第1期函館区営改良工事」からスタートします。港内浚せつおよび防砂堤，船入潤（船を留める場所）の築設など本格的な築港工事の第一歩を踏み出しました。さらに，北海道第1期拓殖計画により，西防波堤と防砂堤2基を築造。これによって静穏な水域が拡大され，また接岸施設も整えられ，湾岸の開発も海岸町から七重浜方面へと拡大されていきました。

第2期拓殖計画では，西防波堤の増設と北防波堤の新設，さらに海岸町地先にふ頭新設が計画されましたが，太平洋戦争のため大半の工事は戦後に持ち越されることとなります。戦後は昭和26（1951）年に重要港湾に指定され，翌年には北洋漁業が再開されます。その後の函館の造船，製鋼，セメント，石油化学など，基幹産業の進展は目覚ましいものがありました。昭和36（1961）年に第1次港湾整備5か年計画が発足し，西防波堤，北防波堤の外かく施設が整えられ，係留（船をつなぐ）施設としては中央ふ頭，北浜ふ頭，木材取扱施設および万代ふ頭が整備されました。



写真 2 北洋漁業の出港風景
(函館市中央図書館所蔵)

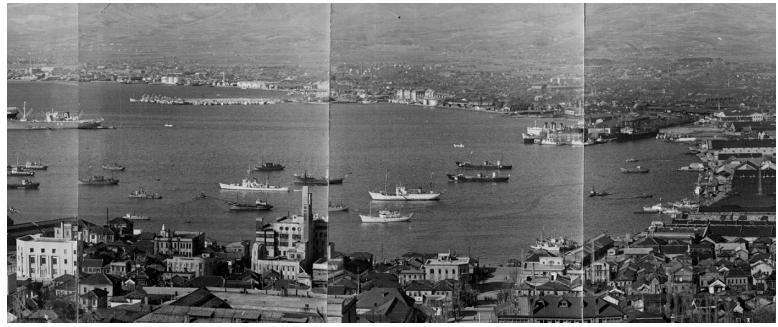


写真 3 昭和30年頃の函館港 (函館市中央図書館所蔵)



写真 4 ライトアップされた金森倉庫

物流拠点としての港町ふ頭が平成14年に供用開始

函館港での貨物取扱量は北海道全体の約15%を占め、青函連絡船が廃止された後も、道南はもとより道央等北海道全体の農林水産品の運搬などの物流を支えてきました。また、道路災害などの非常時に日々の生活に支障が出ないようにするための、海上ルートの確保においても函館港の役割が期待されています。

万代ふ頭や中央ふ頭は昭和40～50年代に造られた古いふ頭でしたが、平成14(2002)年5月には、水深14mの岸壁を有する大型ふ頭として港町ふ頭が供用を開始しました。このふ頭では大型の多目的クレーンを設置し、現在、物流の主流となっているコンテナ貨物も取り扱えるようになっています。歴史的な建造物が多く残る西部地区(大町・末広地区)には、遊歩道を設置した石積みの物揚場、護岸を整備。荷役バース(船の停泊場所)だけではなく、ウォーターフロント整備にも力を入れています。また、函館駅の北側に旅客船ふ頭も計画しています。

函館の魅力アップに向けた多彩な函館港の役割

函館港は物流だけではなく観光や憩いの場としても多彩な機能を持ち、それぞれの魅力アップに向けた取り組みを進めています。函館市は道南から道央や道東へ向かう観光経路の拠点であり、函館港は年間約500万人の函館観光の顔になっています。金森倉庫、摩周丸やシーポートプラザ周辺の函館港ベイエリアでの買い物、散策をはじめ、函館山や西部地区の丘からの眺めも、港を中心とした眺望となっています。

さらに、函館港には水産物の市場があり、水産物を取り扱う港としても知られ、地元の人々の食を支えるとともに、湯の川など函館を訪れる観光客の「新鮮でおいしい水産物をぜひ函館で食べたい」という要求を満たしてくれる場でもあります。また、「緑の島」は、船の泊地を掘る際に出た土で埋め立てた用地で、スポーツ、家族での釣り、市民の方々の散歩などで賑わいをみせるなど、食と憩いのエリアとしても大きな役割を果たしています。

いま函館港は、国内外をネットする物流拠点としての機能だけでなく、ウォーターフロント開発やクルーズ船の増加などを踏まえ、市民や観光客にも魅力ある港湾として、函館のまちづくりの中核的な役割を担いながら発展を続けているのです。

【参考文献】

函館市史(編集・発行 函館市)

【写真出典】

「ほっかいどうかいはつグラフ49号」北海道開発局広報誌